

者の全てが、ともに学びあい、育ちあい、新たな教育的価値を創造し、共有しあってはじめて、子どもたちも十全に成長・自立をはとげていくのではないかという思いを強く抱きはじめています。子どもの発達・学習権の保障をめざす学校は、自ずと教育における開放と協同と創造・発達の原理に立つことが求められるのであろう。

学園では、学年クラス制をやめ、縦割クラス制をとっている。クラス編成も担任教員も子どもたちが決めていく。教育内容はメニュー方式を増やし、子どもたちがより自分の興味や関心にもとづいて選択する。青年期教育では、とりわけ、この

ように、子どもたちに教育の自治と自己決定と選択性が保障されなければならないと思われる。

子ども・国民のための学校は、学習労働における子どもの最善の利益を追求し、教師だけでなく、父母、関係者による相互の参加協同システムの上に新たな教育労働を創造・成立させていくことである。そして、ここに生みだされる教育活動は、それ自体、子ども、親、教師、関係する者全ての発達の自己運動を包摂するのである。

さて、見晴台学園は、来年4月から刈谷市に移転する。小さな校舎を建て、現在コミュニティスクールづくりへの大きな夢見て。

第6分科会

文化の協同と協同組合

お互いのあるものを 出し合い お互いに いただく

松田 みつ子 (歌舞劇団・田楽座)

生まれる(今を生きる田楽法師に)

田楽座は、1964年。民俗芸能の宝庫である信州は伊那の谷に、専門の創造団体として創立されました。

その昔、田楽(でんがく)は、わが国の中世の代表的芸能の一つで、田植えの時に太鼓・鼓・ササラを打ち鳴らして、早乙女たちを励まし、豊作を祈願したことから始まったと伝えられています。

平安朝の終りになって、それ以前から中国より渡ってきた散楽(さんがく)と呼ばれる音楽芸能のなかから、曲技やこっけいわざをとり入れ、神社・寺院の神事に用いられる様になりました。

この仕事にたずさわったのが田楽法師です。この後、演劇風の所作をとり入れた田楽能も加え、大いにさかえ、今では各地の郷土芸能の中にその影響を残しています。

労作のなかからおこり、大胆に諸芸能をとり入



れて自分のものに消化し、神社・寺院をはじめいたる所で演じ歩いて、芸能をみがきあげていった田楽と田楽法師の由来にちなみ、働くことと暮らしのなかの喜怒哀楽を民俗芸能のなかに求め、客席と舞台の交流を通じて新しく発展させたいと願う、私たち一座の名前にしました。

酒のみから子どもまで、誰にも好かれる庶民の

味でんがく、でもあります。

暮らす。そして創る。

中央高速道・伊那インターチェンジから市街をぬけて約20分。中央アルプスと南アルプスには生まれた、高鳥谷山たかすやさんのふもと標高800Mの所に田楽座の本部があります。

座員はそれぞれ各専門部に分かれて活動しています。

○公演部は——

演技者・舞台スタッフの部署で、地域公演、学校公演、おやこども劇場公演、小公演などあらゆる場所を公演して回ります。

本部にいる時は、舞台の稽古と道具づくり。また各地の芸能取材に出かけ、現地の人たちと交流しながら、その土地の芸能を学びます。

○制作部は——

観客の組織、公演の興業など、人との出会いを求めて、カバン一つでどこへでも飛んでいきます。本部へ帰ってくれば、公演依頼の受付や、宣伝材料の製作、発送に精を出し…時には電話口の相手と、町づくり、村おこし談義も…単なる公演の制作者と言うよりも、生活する人びとのオルガナイザーと言えるかもしれません。

○本部は——

座員の食事の世話から、子どもたちの保育まで、田楽座の母的部署。また、サークル・婦人会・青年会・学校の先生などを対象とした、太鼓・民舞の講座の受付など、地域の人びとが田楽座と気軽に関われる窓口でもあります。時には、お茶を飲みながら話しをしに来ただけの人の相手もして…

本部のまわりにあるいくらかの耕地では、仕事の合い間を見て農作業をしては、夏や秋のみにりに感謝し、土の手ざわりを確かめています。

座は、その創立からこうした仕事を、暮らしを共にしながら進めきました。仕事も維持し、暮らしも成り立たせていくには、お互いに協力し合い助け合っていくしかなかったのです。

座員の給料も30年たってもやっと国の平均額の1/4。「食べていけるかい？」との創立以来のみな



さんの心配は、今もあまり変わりません。でも、少ない財源を有効に使い、一人一人のちがった持ち味を生かして力を合わせると、不思議なエネルギーがでてくる事も学んできました。それは、祭りや芸能の根っこにある、お互いを生かし合う生命力にも似ています。

私たちとの出会いを通じて、各地に「太鼓のサークル」や「まつりおこし」ができていきました。そこでも「まつりづくり、から学んだ知恵を生かしたたくさんの方がたが、地域の大切な担い手として働いています。その人たちとの生き合いが、又私たちの舞台と暮らしの源でもあります。

お互いのあるものを 出し合い

お互いに いただく

そんな暮らし方が、「この田舎で、よく、この仕事だけで、飯を喰ってきましたねえ」との質問のこたえかもしれません。そして、そんなやむをえざる私たちの暮らし方が、今の世の中ではからずも「生きよう」としている。様です。